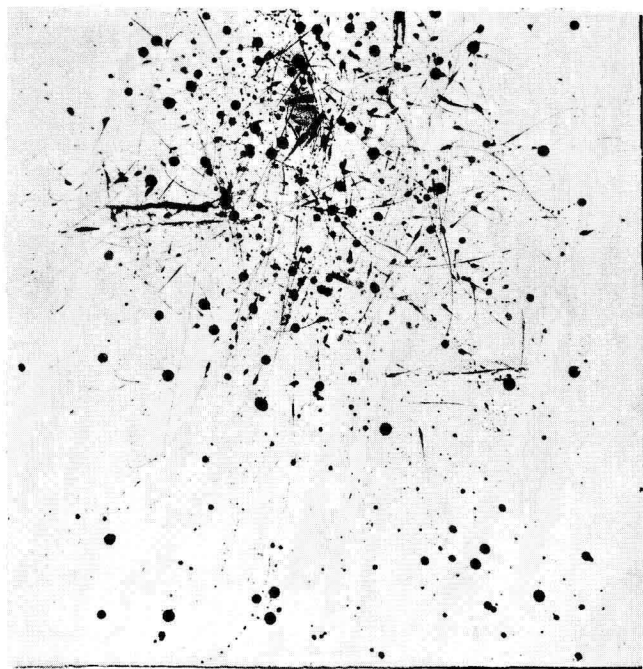


土の器 阪田寛夫



土の器

阪田寛夫



文藝春秋

著者略歴

大正十四年、大阪に生まれる。
昭和二十六年、東京大学文学
部国史学科卒業。朝日放送に
入社。三十八年退社。昭和四
十一年「音楽入門」を文藝界
に発表、第五十六回芥川賞候
補に推される。昭和五十年、
「土の器」で第七十二回芥川
賞を受賞。著書に「わが町」
「我等のブルース」「庄野潤三
ノート」、詩集「わたしの動
物園」などがある。

土の器

昭和五十年三月十五日 第一刷

著者 阪田 寛夫

発行者 檜 原 雅 春

発行者 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話(〇三)二六五一・二二一
振替口座 東京七八七四三番

印刷所 凸 版 印 刷
製本所 加 藤 製 本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

目次

音楽入門

七

桃雨

五

土の器

七

足踏みオルガン

一六

ロミオの父

二七

あとがき

装
幀
司
修

土
の
器

音樂入門

七十年前に私の家に吹き渡ってきた西洋音楽の風が、どんな工合に渦巻き、どんな色に染まり、どんな調子に響いてきたか、その跡を辿ってみようと思う。

父が生まれたのは明治二十年の暮である。記録によればこの年わが国で初めてシンフォニーが演奏された。音楽取調所の卒業演奏会に卒業生一同が「ビートルヴェン作シンフォニー」を奏したという。ビートルヴェンは即ちベートーヴェンである。

また同じ取調所の編集による「幼稚園唱歌集」がこの年出版された。取調所の責任者伊沢修二の方針によれば、日本の童謡その他「最も簡短ナル謡類ヲ集メ、西洋ノ童謡ニ比較シ二者折衷シテ相当ノ歌曲ヲ」作ったのであった。

父は広島県の漁師町に生まれた。生家の東隣は白壁の蔵、西側は海へ下りる小路で、祖母は父をおぶってこの小路を歩きつ戻りつ、広島弁の歌をうたった。

向こうの山に

猿が三匹通りようて

どの猿も物知らず

一の中の小猿が

よう物知って

日本国中歩いて

鯛を三匹取ってきて

たいて食うても塩辛し

焼いて食うても塩辛し

あんまり塩が辛ろうて……

このまま育てば父も平均的な日本人として、今ごろは「仏」になっていた筈だ。しかし広島市にハイカラな伯母がいて、新しく出来た幼稚園というものに満五歳になった甥を入れてみようと思ひ立った。そこで父はキリスト教と西洋音楽に出逢った。

幼稚園の前庭には西洋の紅い花、ゼラニウムが咲いていた。袴をはいた先生がオルガンを

踏んで教えてくれた最初のうたは、

槌もて鍛冶屋

ひねもす何する

槌はうたう

カチカチカチカチ

.....

という「幼稚園唱歌」であった。ヘンデルの曲で訳詩(?)も生硬なものだが、父は大へん気に入った。「猿が三匹」のうたとは違って、これは「パン菓子」の味がした。

園児がオルガンに触れるときびしく叱られたが、父は何度も禁を犯した。他の腕白どもとは違って、彼はうっとりと音に聞き入っているものだから先生にすぐつかまった。

日清戦争の景気につけこんで、父の一家は広島から大阪へ移住した。梅田ステーション裏の長屋を改造して、祖父がニスの製造を始めたのである。

中学二年生になった父はある日クリスチャンの友人に誘われて江戸堀のキリスト教会の牧師の家へ遊びに行った。牧師は阿蘇の神主の息子で国士的な人物だが、娘が大勢いるという

のでたのしみにして行った。玄関先に立っただけで体がうずくような西洋の匂いがした。

父とその友人は茶の間の椅子に腰をかけさせられて、バタ砂糖つきのバンと、熊本の紅茶試製場からとりよせたという紅茶をこちそうになった。長い髪にリボンをつけた三人の娘が会話に加わったが、その調子は何ともいえず上品で明るくて自由である。そのうち牧師に促されて女学生らしい上の二人の娘が、オルガンとバイオリンの合奏を聞かせてくれた。悪びれずさっさと弾奏を始めた二人の様子を見ると、それは客をたのしませるよりは、自分たちが音楽を「エンジョイ」している風であった。

「現今の腐敗せるソーシャル・ライフにありて、此のホームこそ清潔なる花園なり」と父はその日の日記に書いた。

「而して、花園を支うる二本の柱は何ぞ。一は愛也。他は音楽也。ああ、新日本の道德改革は家庭の建設より始めざるべけんや」

次の週から父は教会へ通いだした。教会には白い衣をきた聖歌隊の男女がいて、高い声と低い声を一度に合わせて讃美歌をうたった。ばらばらの声のようで、しかも一つに統合されている、その微妙な工合を聞きながら、父は胸震いがとまらなかった。

間もなく日露戦争が始まって、父の音楽生活における最初の活動の機会が到来した。れいの国士的な牧師がキリスト教徒報国義団を組織し、中学四年生の父はその傘下に加わって梅

田駅で出征兵士を見送る有志団の一員となった。

下りホームに兵士を満載した列車が着くと、先ず湯茶の接待で労をねぎらう。一通りの接待が済むと有志団は集合してホーム中央に一列にならび、発車時刻までベビールガンの伴奏に合わせて歌をうたった。曲は「ギッチョンチョンのバイのバイのバイ」で知られる外国曲の替え歌である。

悪魔はいかほど強くとも

われらの大将はイエスキミよ

恐ることなく戦えよ

かちどきあぐまでは……

死地に赴く将兵たちが、この歌からどのような感銘を受けたかは不明であるが、十数名の有志男女は兵士の魂をなぐさめ浄めるために、胸を張り天へもとどけと合唱した。下り線がまだ停車中に、貨物線に新しい出征列車が入ってくることもある。その時にベビールガンをかっいで大急ぎでブリッジを渡るのが父の役目であった。

彼は一日も休まず、学校がひけると梅田駅へかけつけて、「悪魔はいかほど」をうたった。

そのうち仏教徒も歓送の団体を組織したので、対抗上有志団は夜遅くまでがんばることにした。最初のうち合唱を指揮していた医専の学生は、学業がいそがしいといって怠ける日が多くなった。そんな時は、父が「一二、三」と最初の音頭をとった。しかし、指揮者がいなくてはどうも歌に力が入らないのである。仏教徒が「敵は幾万」を歌いだしたので負けてはいられない。ある日彼は、誰からも頼まれなかったのに一歩進みでてげんこで指揮をした。その日の歌声は格別に心がこもったように、彼には聞えた。その日から彼は指揮者になった。幸い、出征兵士は跡を絶たず、翌年になるとこんどは凱旋兵士の歓迎が忙しくなった。夜更けになるとテントで芋粥を煮て食べ、またがんばった。背も高く、声も大きい父は、指揮者としての貫禄も十分であった。

中学を出ると、彼は東京の専門学校に進学した。応用化学を専攻したのは家業のニス屋をつぐためである。しかし在学中に彼が最も力をつくしたのはキリスト教青年会の運動で、その次が音楽部の活動だった。

彼はせっかく東京へ出てきたからには、日頃尊敬する著名な人物に逢いたいと思い、思い立ったらすぐ手紙を書いた。何人かは返事をくれた。父は青年会の友人を引きつれて千歳村の徳富蘆花の家を訪ね、逋信大臣後藤新平をYMCA主催の講演会に呼んで教官を驚かせた。音楽についてもその通りだった。学校の音楽部へ、彼は当時一流の演奏家安藤幸子や歌手